

【開催中】~4月8日(火)
テーマ展「直弼発見! 井伊直弼と相州警衛」
4月11日(金)~5月13日(火)
特別公開「国宝・彦根屏風」



▲紙本金地著色風俗図(彦根屏風)


ギャラリートーク「国宝・彦根屏風」
4月12日(土) 14:00~15:00
解説:彦根城博物館学芸員
※事前申し込みは不要です。当日、当館講堂にお集まりください。

観覧料が必要です

常設展示の名品

「ほんものとの出会い」
常設展示「ほんものとの出会い」では、譜代大名筆頭・井伊家に伝来した名宝を中心に、80点余りを展示しています。

4月9日(水)~6月16日(月)
金地花車蒔絵硯箱



硯、水滴、筆などの筆記具一式を納めた硯箱。箱の蓋には梅、桜などの花を載せた花車を、内側には菊の花を金蒔絵で表した、華やかな意匠の作品です。

※4月8日(火)~同10日(水)は、展示替えのため一部閉室しています。


文化プラザだより

チケットのお申し込み、お問い合わせは
チケットセンター ☎27-5200 (9:00~19:00)
インターネットでも購入いただけます。http://bunpla.jp/

★★★ 注目のイベント ★★★

松竹大歌舞伎
市川亀治郎改め四代目市川猿之助
九代目市川中車 襲名披露

「市川亀治郎改め四代目市川猿之助、九代目市川中車襲名披露」という注目の公演が彦根に参上。歌舞伎界のみならず、映画、テレビなどのメディアでも大活躍、人気を博している市川猿之助、市川中車ご二人そろっての襲名披露口上は必見、この機会をお見逃しなく!



◎松竹


■演目「太閤三番叟」「口上」「一本刀土俵入り」

6月18日(水) グランドホール
昼の部 13:00開演(12:30開場)
夜の部 17:30開演(17:00開場)

指定 一等席7,000円 二等席5,000円 三等席3,000円
【発売中】

4月の休館日 7日(月)、14日(月)、21日(月)、28日(月)


4月19日(土) 17:00~ グランドホール
玉置浩二 GOLD TOUR 2014



ドラマ「東京バンドワゴン~下町大家族物語」のエンディングテーマ「サーチライト」を含むオリジナルアルバム「GOLD」のリリースを引っさげて全国ツアーが決定。天才的なライブパフォーマンスは必見。

指定 7,800円 (4月1日以降は8,023円) 【発売中】

4月20日(日) 14:00~ エコーホール
大阪音楽大学出張講座
オペラ物知り講座 in ひこね Vol.7 「ラ・ボエーム」



作曲家、オペラ、その時代背景とともに、さまざまなエピソードや解説を織り込みながら、有名なアリア、アンサンブルとともにハイライトでオペラを楽しむ講座です。

自由 前売2,000円 当日2,500円
ペア(前売のみ・100組限定) 3,500円 【発売中】

【各公演 発売初日の予約の取り扱いについて】
※電話予約・インターネット予約のみの受付となります。
※窓口でのチケット引き取り・販売は翌開館日から承ります。

ときの玉手箱

博物館からのメッセージ

直弼の江戸紀行 ―「つゆわけごろも」―

井伊直弼20歳の天保5年(1834)7月、彼は江戸に向け彦根の地を出発しました。当時、直弼は藩主直亮の弟として、彦根の尾末町御屋敷(埋木舎)に暮らす身であり、江戸行き

は他大名家の養子となることを考えてのものでした。しかし、先に弟直恭が日向延岡(現宮崎県)内藤家の養子に決まり、結局、直弼の養子縁組は調うことなく、翌6年8月に彦根に戻りました。この江戸での挫折は、その後、直弼が埋木舎で文武の道を修養していくことになった転機とされます。彦根藩井伊家文書に伝わる、「つゆわけごろも」と題する直弼の自筆本は、この江戸への往復の道中と江戸滞在の1年間の記録です(写真)。この書により当時の直弼の心境を探ってみましょう。

「つゆわけごろも」は、紀行文学風にまとめたもので、直弼が時々詠んだ和歌を文中に配しています。直弼が道中や江戸滞在中に付けた日記を元に、後日、文学作品としてまとめたと考えられます。

彦根から江戸へは中山道を行き、帰路は東海道を通りました。道中の名所や故事などについて書き留めています。江戸滞在中は、外桜田の彦根藩上屋敷内に暮らし、將軍の墓所がある上野寛永寺や、浅草寺、芝増上寺、日吉山王社などの有名寺社に参詣し、また、赤穂浪士の墓がある泉岳寺や隅田川堤の桜見物など江戸の名所にも訪れています。

同書からは、江戸滞在中には、兄である藩主直亮から氣に掛けられていた様子も伺えます。直亮が彦根藩下屋敷に遊びに行く際の供や、直亮が開いた能の会の見物を命じられています。彦根への出発が迫った天保6年8月6日には、直弼へのはなむけとして直亮が能を催し、その中で直弼は直亮から求められ鼓を打っています。9日には、直亮から盆を受け、「唐の硯」を拝領し、翌10日に暇の挨拶をした際には、「道中寒からうから氣を付けるように」と直亮から声を掛けられています。このとき直弼は江戸滞在中に直亮から受けた恩恵を「ふかきめぐみの露の玉」と表現し、感謝しています。

8月11日に江戸を発った直弼は、同日21日に彦根に到着しました。秋にも関わらず雨続きの道中でした。鳥居本宿で休憩し、出迎えの人と

もに佐和山の切り通しを越え、彦根城下に臨んだとき、また雨が降ってきました。このところで直弼は次のように著しています。

(この雨により袖がますます濡れて乾かないけれども、袖は「武蔵野の露」に「恵みの露」が添えられ濡れている。(だから私が今着ている)この「露分け衣」を脱ぎ置くことがどうしてできようか(現代語訳)

「露分け衣」とは、露の多い草の中などを分けいくときに着る衣のこと。「武蔵野の露」と「恵みの露」で濡れているので、脱ぐことができない。「恵みの露」とは、直亮から受けた恩恵のことです。一方、「武蔵野の露」は、大名家への養子という夢見た立身出世を果たせず、江戸で直弼の袖を濡らした涙と理解できるのではないのでしょうか。

「つゆわけごろも」の題は、当時直弼が抱いていた悲しみと感謝の気持ちを表しているものと思われれます。(彦根城博物館学芸員 渡辺恒一)

写真の古文書は、4月9日(水)から6月16日(月)まで展示します。(期間中無休)